

## 論文

## 日露戦争期に発祥した語彙・表記をめぐって

—「露助」と「征露丸」を中心に—

シャルコ アンナ

アブストラクト：本稿では「露助」と「征露丸」を例として取り上げ、日露戦争期に発生した「露」という漢字を含む新語彙について、それらの解釈・表記の通時的な変遷を辿り、各時期における使用実態・認識を明らかにした。さらに、「露助」と「征露丸」両語の表記が日露関係の情勢によりどのように左右されていたか、また、その表記における漢字が各語のイメージ作りにどのように働いたかという点に注目した。

## はじめに

明治7（1874）年、ロシア側の要求によりロシアの国名漢字表記が「魯西亜」から「露西亜」に変更された。1904–1905年の日露戦争期には、ロシアが新聞などのマスメディアで毎日のように取り上げられていた影響もあり、「露西亜」、「露国」、「露人」など「露」の漢字を使った表記がすっかり定着し、「魯」は使われなくなる。

それと同時に、「露」という漢字の「わずかな」「はかなく消えやすい」といったマイナスの意味合いが強調されるようになり、「露のはかない命」や「日が昇ると、露は消える」などの文句が当時の風刺などに散見されるようになった<sup>(1)</sup>。さらに、戦争という敵対関係を背景に、「征露」、「露助」、「露探」など、「露」の漢字を造語要素として使った語の発生も見られ、

「征露軍」・「征露丸」や「露助パン」・「露助屋」のようなより長い単位の語も作られていく。

本稿では「露助」と「征露丸」を中心に、日露戦争期に発生した「露」という漢字を含む新語彙について、それらの解釈・表記の通時的な変遷を辿り、各時期における使用実態・認識を明らかにする。また、「露」という漢字はこれらの語のイメージ作りにどのように働いたかという点に注目する。

## 1. 露助について

「露助」が取り上げられている先行研究として、佐藤（2009）と向後（2015）がある。佐藤（2009）は、日露戦争の結果日本領となった南樺太で発行されていた「樺太日日新聞」における残留ロシア人の表象について、「露助」と「露人」という言葉に焦点を当てて考察している。調査対象となっている期間は1910年5月～1917年3月である。

向後（2015）は、日露戦争期におけるロシア

(1) ロシアの呼称・表記の変遷史や日露両国における「露」のイメージについては、シャルコ（2016a, b）を参照。

兵の全般的なイメージについて述べているが、「露助」という言葉に関する考察も行っている [pp. 308-306]。「露助」が辞書に載るようになったのは、日露戦争後のことであると指摘しているが、それ以前の歴史、すなわち『「露助」』という言葉がなにをもとにいつから生じ、どのように広まったのかについて断定するのは困難である」としている [p. 308]。

このように、これまでの研究において「露助」という語が取り上げられているが、その調査期間として主に日露戦争期とその直後の時期のみが注目されており、「ロスケ」という言葉の出現の経緯や「露助」という漢字表記の役割などについてはほとんど言及されていない。

### 1.1 日露戦争以前の「ロスケ」

『日本国語大辞典』（第2版）の「露助」の項目に次のように記されている。

- ① 露助（{ロシア} russkij「ロシア人」の意をも  
じって、人名のように表わした語）

かつてロシア人を軽蔑の意を含めていった語。

\* 風俗画報 二九一号 [1904] 征露雑項「ウヌ露助ッ」  
と叫びつつ走りかかりて、敵の銃を奪ひ取り」

\* 蟹工船 [1929] 〈小林多喜二〉一「我々日本帝国  
人民が偉いか、露助が偉いか」[第13巻, p. 1197]

上記のように、先行研究と『日本国語大辞典』、両者ともに「露助」の出現を日露戦争期としており、戦前の使用実態に関しては用例があげられていないが、筆者は日露戦争以前の資料や文献においていくつかの記述を見つけることができた。

まず、『魯西亜弁語』表・裏（1796）という

初期のロシア語の語彙集に注目したい。この資料は、露和字彙の表の巻と和露語彙集の裏の巻から成り、ロシアの数量単位の解説などにおいて、「アリシン ヲロスカノ一尺」の如く、「ヲルスカ」または「ヲロスカ」という言葉をしばしば見かける<sup>(2)</sup>。(引用文中の下線は筆者による。以下同様)

この「ヲルスカ/ヲロスカ」は「ロシアの」という意味を表しており、同資料に「ヲルスカハヲロシヤ也土俗カク云由」と説明されている。すなわち、ロシア人自身が「ヲロスカ」と言うことから、「ヲロシヤ」の代わりにこの語を用いたとある。なお、この場合、「ヲロスカ」という語形が使われているのは、ロシア語の「russkaya - русская」という形容詞の女性形が基となったためである。同形容詞に「ロスケ」により近い男性形「russkij」と複数形「russkiye」がある<sup>(3)</sup>。

次に「ロスケ」関連の用例を確認できたのは『環海異聞』（1807）という漂流記である。この資料において、ロシアの国名について次のような記述があり、「オロスケヤ」はロシアの本名

- (2) 「ヲルスカ」と「ヲロスカ」という2つの語形の存在に関しては、「ヲルスカ」の方がロシア語の綴り「russkij」に近いが、最終的には「ヲロスケ」が優先となる。

その理由として、前例の「(ヲ) ロシア」の「ロ」の影響のほか、ロシア語と日本語における「ウ」の発音の相違が考えられる。ロシア語の「ウ」は円唇母音であり、唇を突き出して丸めて「オ」に近い形で発音されるため、日本人には「オ/ヲ」のように聞こえたことが推測できる。

- (3) ロシア語の形容詞は、男性形・女性形・中性形のように分かれており、また単数形・複数形であるかによっても語形が変化する。

の一つとしてあげられている。

- ② 本名ハ「リエシア」「オロシヤ」又「ヲロシイスコイ」又「オロスケヤ」又「魯西亜」と云ふ音訳字を用ひ又通称に従て「オロシヤ」と記し [ref. 文庫 8 C006, 第 1 巻, 第 24 画像目]

さらに、北海道大学の北方関係資料に 1811 年、松岡良之丞により作成された『おろすけ人言葉』<sup>(4)</sup> という聞き書きの資料があるが、その文中にも、「ヲロスケ人身分」「ヲロスケ人コトハ」など、ロシア人を指す語として「ヲロスケ」が用いられている。

このように、当時直接ロシア人と接した数少ない日本人に限定されるものの、江戸後期に既に「ロスケ」の前身に当たる「ヲロスケ」という言葉が使われていたことが分かる。

さらに時代を下り、外務省記録「困難船及漂流民救助雑件、露国ノ部」第一巻では、明治 16 (1883) 年 7 月の日付で北海道に漂着したロシア人が救助された件に関する資料があり、その中に次のような文章が見られる。

- ③ 共何分言語不通唯「ヲロスケ」ノ一言ノミ相分り候ニ付多分魯西亜人ナル [JACAR: ref. B12081753300, 第 2 画像目]

同伴に関わる数日後の日付の書簡に「漂著ノ

モノハ露領薩哈連島へ流刑中該島ヨリ逃亡セシモノニ有ノ趣」という記述がある。すなわち、日本領に漂着したロシア人は、サハリン島から逃亡した流刑囚であり、自分たちはロシア人「=русские (ルスキエ, 複)」だと日本人に伝えようとしたが、日本人はそれを「ヲロスケ」と聞き取ったと考えられる<sup>(5)</sup>。

この出来事の背景には次のような歴史事情があった。1855 年の「日魯通好条約」により、樺太が国境未定の地と規定され、その結果、日露両国人の部分的な雑居の状況が生じたのである。さらに、1860 年代後半にロシア政府が多数の流刑囚を樺太に送り、樺太をロシアの監獄島とする方針が示された [秋月 2000: 1]。1875 年に「樺太・千島交換条約」が締結され、樺太がロシアの領土となったが、漁業問題や上記のような逃亡事件などが発生し、北方における日露の接触は絶えることがなかった。

このような状況を背景に、1895 年の『太陽』に「樺太探検記」が掲載され、その中に「在島

(5) 「ヲロスケ」の「ヲ」は、「ヲロシヤ」と同様に、ロシア語の [r] は日本語の [r] とは異なり、舌を巻いて発音されるため、[r] の前に母音があるように聞こえるという。平岡 (1934) は、日本人の漂流者の聞き書きから次のような例をあげ、「ヲロシヤ」に限らず、その他の [r] から始まるロシア語の単語も、語頭に母音があるように聞き取れることが少なからずあったと指摘している。例：縋絆 (Rubashka) ヲリバシカ、手 (Ruka) オルカ、袖 (Rukav) オロカワ、魚 (Ryba) アレバ等 [pp. 7-8]。

同様な理由によりモンゴル語では、ロシアのことが「Орос (オロス)」と呼ばれている。その「オロス」が明代に中国に伝わり、「俄羅斯」などと表記されるようになったことも早くから指摘されている [Smith 1870]。

(4) 1811 年に千島列島を測量していたロシアの軍艦ディアナ号の艦長ゴロヴニンらが、クナシリ島で捕まえられ、2 年以上日本に抑留された。『おろすけ人言葉』は南部藩士松岡良之丞という人が、ゴロヴニンらを松前まで護送した際に記した聞き書きである。

記事（土人ロスケ及アイノの風俗）」という部分がある。その内容は、ロシアのサハリン島の開拓及び当時の実態についての報告であり、「ロスケ」という言葉に関する言及もある。

- ④ 魯國政府は＜中略＞年々罪囚を同島に送る其數毎年五六百名を超過す而して此等罪囚の看守を兼ねて沿海警衛に備ふる兵士亦尠なからず同島に在る  
 ＜中略＞ 土人（魯斯偈と呼び前記刑餘の魯人なり）皆農牧を營み稀には行商を營む者あり [p.57]

この記事に「ロスケ」が何度も出てくるが、その「ロスケ」という言葉に「魯斯偈」という漢字が当てられている。また、「魯斯偈と呼び前記刑餘の魯人なり」とあり、一般のロシア人（魯人）に対して、樺太在住の流刑囚や囚徒に対する呼び名とされており、樺太では既に定着していた「ロスケ」が、日本内地ではまだ広まっていなかった様子が窺える。

このように、北方における日本人とロシア人との接触により、日本人が生ロシア語を耳にする機会を得て、ロシア人が自分のことを「ロスケ（russkij 単数形 / russkiye 複数形）」と呼んでいたことから、日本人もこの語を使うようになったと考えられる。特に、明治初期に日露両国の雑居地となった樺太では、「ロスケ」が普及し一般的に用いられるに至った。なお、この段階では、「ロスケ」という言葉には軽蔑的な意味合いがないようである。

## 1.2 日露戦争と「露助」という漢字表記の登場

向後（2015）は「日露戦争下にあつて、『露助』は、軍人も民間も、敵愾心をたたきつける

集合的な敵イメージとして広く使っていた」と述べている [p.307(54)]。

文末の表1にも示したように、当初は「(ヲ)ロスケ/ロスキー/ロスキイ」のようにカタカナ表記が多いものの、戦争が始まって間もなく「露スキー」「露助」という漢字表記が現われる。さらに、「ロス」のような略称の例もいくつか見られる。

「露助」という言葉は出征兵士の投稿、戦場からの現地報告、戦争日記のような口頭語性の高いジャンルの文章に現れることが多いという特徴を持つ。

「露助」という表記の「ロスケ」との対応関係の面では、漢字表記の存在が「ロスケ」という語形の定着に働いたと言える。当初は、「ルースキー」、「ロスキー」、「ロスケ」のように、語形に揺れが見られるが、「露助」の漢字表記が定着するとともに、「ロスケ」の語形も固定されていく。

漢字表記の語義への影響に関しては、向後（2015）が、『露助』と漢字表記されるときに、蔑みや卑しめの意がより強くなるようだ」と指摘しているように、音のみを表しているカタカナの「ロスケ」より漢字の「露助」の方が具体性がある、イメージを持たせやすいと言える。「露助」の「露」は、「ロスケ」の「ロ」という音と「ロシア」という意味、両方を兼ねて表しているが、「助」は「スケ・スキー」への当て字である。「助」という字は擬人化する機能を持っているほか、否定的なイメージの語に使われており、「ロスケ」に侮辱的な意味合いを与えるにはこの「助」の役割が特に大きかったと考えられる。

『日本国語大事典』では、接尾としての「助」

は、「ある語に添えて人名化した語を作る」と説明されているが、佐藤（2009）も指摘しているように、「助」の付く擬人名には、『芋助』、『凸助』、『寝坊助』など、マイナスのイメージの語が多い [p.112]。その他にも「折助」（折助根性 骨惜しみをし、主人の目を盗んで怠けようとする根性）、「雲助 / 蜘蛛助」（雲助根性 人の弱みにつけ込んでゆすりをするような卑しい根性）のような否定的な意味の語や「角助」，「久助」，「三助」など，下男や身分の低い者の通称として用いられる例がいくつも見られる。[逆引き広辞苑 1999: 497]

日露戦争期の新聞や雑誌の滑稽問答に「助」の字が当てられた理由について、「助」の字義を活かした様々な「説」があげられている。「負けた揚句にお助けください〜と降参するから」[読売新聞 1904年12月4日]，「助平」だから [征露戦報 第5号 1904年]，「國は廣助，兵隊脆助，ヨロ々ヨロ助，ヘロ々ヘロ助<略>」だから [読売新聞 1905年5月23日] などのバリエーションが見られる。

このように，マスメディアの影響もあり，日露戦争期には，「ロスケ」が全国的に普及し，「露助」という表記が定着した。「露助奴」，「ロス毛唐」，「ウヌ露助」のような表現や「助」という漢字表記も否定的なイメージ作りに働き，「露助」が蔑称として認識されるに至った。

### 1.3 戦後の使用実態

「ロスケ」という言葉が辞書に掲載されるようになるのは日露戦争の後のことである。なかでも『辞林』（1907）と『大増訂 ことばの泉』（1908）は，最も早く「露助」を収録している。例えば，『辞林』（1907）での解説は以下の通り

である。

- ⑤ ロスケ [露助] (名) ⊖ 『「ロスケー」の轉』  
「ロシア」人をのゝしりていふ語。⊖轉じて，人をのゝしりていふ語。[p.1600]

その後も多くの辞書で「露助」という言葉が収録されたが，日露戦争以前の資料にあるような単にロシア人を指すという意味は見当たらなくなり，「ロスケ」が軽蔑的な表現としてすっかり定着したことが窺える。

ロシア側の文献にも「ロスケ」に関する記述を確認することができた。ロシア正教会によりニコライ・コサートキンの後継ぎ者として日本に派遣されたセルギイ府主教は，1909年8月に南樺太を訪問し，次のようなエピソードを日記に記している。

- ⑥ 日本軍の兵舎を通りかかった際，一人の兵士が追いかけるように「ロスケ！ロスケ！」と叫んだ（「ロスケ」は日本人のロシア人に対する蔑称だ。ロシア人が日本人を「ヤポーシカ」と言うように，日本人がロシア語の“русский”をもじって言う語）。無視して先に進んだが，後ろから「ロスケ，ロスケ，ロスケ！」という声は強まる一方。<略>一度も悪口を言われることなく14か月間日本で過ごしてきたが，こうやって兵士に罵られるのは誠に辛い。[Краеведческий Бюллетень №1 1991: 43 ※筆者訳]

このように，少なくとも日本内地から来たロシア人は「ロスケ」について知っており，蔑称として認識していた。

一方，佐藤（2009）の「樺太日日新聞」（1910－



1917年)の調査によれば、南樺太では残留のロシア人に対して「露助」が頻繁に用いられたが、肯定的な使用例も見られ、ロシア人を指すもう一つの語、「露人」とは「言葉の用法でも意味の上でも大きな違いが」見られなかったと指摘している。その理由として、日本内地とは違って、「南カラフトの日本人たちは残留ロシア人の話す「русский (ルスキー)」を実際に耳にしており、それが「ロシア人」という意味であることを知っていた」ためだとしている [pp. 121-122]。

南樺太では、「露助」が日常的に用いられていた証拠に「露助パン」,「露助屋」,「露助学校」などの混種語の誕生もあげられる<sup>(6)</sup>。例えば、1909年8月『樺太探検記』において次のようなエピソードが描かれている。

- ⑦ 樺太にて、パン売りのロシア人の少女が「温かいパン、ろーすきー露助パン」とお客を呼んでいる [p. 24]

さらに、「ロスケットンボポ」や「ロスケ犬」など固有名詞に使われていた例もある。これらの名称の由来も、やはり日露戦争・樺太との関わりがある。

ロスケ犬は、樺太犬の別名で、「日露戦争後、北緯50°以南の南樺太が日本領土となった当時」に用いられていた [世界大百科事典 30巻 2007: 149-150]。ロスケットンボポは、コウリンタンボポの別名で、第二次世界大戦後サハリン (樺太) から北海道に侵入したことから「ロスケタ

ンボポ」と命名された [北海道大百科事典 下巻 1981: 637]。

#### 1.4 差別用語としての「ロスケ」

日本においては、人種・人権にかかわる差別的なことば・表現が話題になるケースは明治期辺りから見られる<sup>(7)</sup>が、本格的に研究され、注目を集めるようになったのは1970年代だとされている。この時期に各テレビ局が「放送禁止用語リスト」を作成するようになる。

1974年の『放送上差し控えたい用語について』(民放連考査情報)の「人種・民族・国家関係」のグループに「ロスケ」を含めて、以下のような言葉が収録された。

- ⑧ クロ、クロンボ、ニグロ、アメ公、ヤンキー、  
ロスケ、ジャップ、土人、チャンコロ、ポコペン、南鮮、北鮮 [差別用語 1978: 288]

1974年の『NETいいかえ集』(NETテレビ)の「放送上さげたい用語」にも「人権をそこなう言葉」として「ロスケ」を「ロシア人」に言い換えることがすすめられている。[差別用語 1978: 294]

このように、1970年代から「ロスケ」が差別用語として認識されるようになり、マスメディアでは使用されなくなる。

(6) ロシア語の「russkij」は、「ロシア人」を指すほか、「ロシアの」という形容詞としても用いられる。「露助パン」「露助学校」のような例は、ロシア語の影響を受けている可能性もある。

(7) 例えば、読売新聞1875年7月5日に『「異人」は差別用語で使用禁止 政府は外国人を奨励』という記事があり、「差別用語」という言葉が既に使われていることが確認できる。また、1919年3月27日の記事に「第一に改めねばならぬ 部落なる代名詞」などがある。

## 2. 「征露丸」について

冒頭で触れたように、日露戦争期に「征露」という語も広く用いられるようになった。それを元に「征露軍」、「征露歌」、「征露丸」などの語が作られ、当時の雑誌名にも『征露図解』、『征露戦報』、『征露雑項』（『風俗画報』）のように、「征露」が頻繁に見られる。

しかし、「征露」は、日露戦争中・日露戦争直後に頻繁に用いられたものの、一次世界大戦期の一時的な復活を除いて、徐々に使われなくなり、辞書にもほぼ収録されなかった。管見によれば近代の辞書に「征露」を載せているのは『大辞典』（1912年、1936年）のみである（せいーろ（征露）名 露國ヲ征スルコト。－「征露軍」）。

一方、「征露」と命名された「征露丸」という丸薬は、現在でも「正露丸/セイロガン」として広く知られており、「征露」という普通名詞から誕生し、「正露丸」という新たな普通名詞（薬の名）として生まれ変わるに至った珍しいケースである。

先行研究に関して、セイロガンは、薬剤・医療分野、法律系雑誌<sup>(8)</sup>、また『昭和レトロ商店街』『マッカーサーと征露丸』のような個人研究において紹介されているが、その語・表記史においてまだ明らかにされていない点が残っており、さらなる調査・考察が必要である。

(8) 鈴木昶「日本の伝承薬④ 正露丸」『漢方療法』2001, Vol.4 No.11 (pp. 71-73), 川瀬幹夫「正露丸事件」『知財ふりずむ』Vol.4 No.48, 2006, pp. 39-53等。

### 2.1 日露戦争期「クレオソート丸」から「征露丸」へ

19世紀末から日本は大規模な対外戦争に突入することとなった。それに伴い外国の戦場での不衛生な環境による腹痛・下痢などが重大な問題として浮上し、欧米で知られ、殺菌効果の高い木クレオソートが日本の軍医に注目されるようになった。クレオソートは1880年代ドイツに留学した森鷗外らにより日本に伝わったとされており、『ことばの泉』（1898年）にすでに収録されている。

- ⑨ けれおそと 結麗阿曹篤。『英語の訛』薬の名。透明無色、類黄色の油の如き液体にして、一種の煙臭を放ち、醗酵、腐敗をふせぎ、菌のいたみを止むるなどの性質あり」[p.502]

このクレオソートを主成分に日本の陸軍医によって胃腸薬が開発され、ロシアを征せようという意味で「征露丸」と命名された<sup>(9)</sup>。朝日新聞

- (9) 大幸薬品のHPや「木クレオソート製剤の史的変遷」（2007）という大幸薬品の社員参加の共同論文には、征露丸の製造・販売は、「1902年に中島佐一氏が「忠勇征露丸」の『売薬営業免許の証』を大阪府から取得」したことからは始まる」とあるが、出典が示されていない。筆者が大幸薬品に問い合わせたところ、中島氏が1902年に取得した免許証の原本は残らなかったが、そのコピー1枚は当社に保管されているとのことだった。その免許証のコピーとされる資料の写しを実際に拝見したところ、コピーの写しであるほか、大幸薬品の本社に保管されており、非公開であるため、その信憑性について判断することが難しい。

それに対して、外務省記録（売薬「征露丸」ノ商標ニ関スル件）及び1971年の東京高裁の判

に掲載された小池陸軍軍医総監の演説ではセイロガンの開発について次のように語られている。

- ⑩ 征露丸<略>は陸軍医学校教授小塚軍医の考案剤にして陸軍にては平時より軍事衛生上何等かの良方法を発見せんと考究中なりしが適々小塚軍医本剤を考案し橋本総監其他諸軍医の考量を経て終に本剤を使用するに至り〔日露役衛生業務 1906年 4月11日:朝刊 4〕<sup>(10)</sup>

当初は、「征露丸」と共に「クレオソート丸」も用いられる例がある<sup>(11)</sup>が、新聞では1904年9月ごろからすでに「征露丸」が定着している。

さらに、1904年9月22日の東京朝日新聞で以下のような記述があり、日露戦争中に兵士全員に「征露丸」の服用を命じていたことが窺える。

例文（「正露丸」名称の起源）によれば、民間の製薬会社に鳥栖製剤合資会社は、いち早く明治38（1905）年9月に「征露丸」の文字からなる商標の登録を得ている（登録第24, 208号）。一方、中島佐一は、明治40（1907）年に初めて「忠勇征露丸」を発売する免許を得て、大正11（1922）年ごろ鳥栖製剤会社に資金の提供を行い、持分を譲り受けて登録商標の共有者となったとある。

- (10) 本記事には考案者名は「小塚」とあるが、それはおそらく「戸塚」の聞き間違いである。「所謂征露丸ノ性質」（『偕行社記事』1904）など、当時の資料では「戸塚軍医学校教官」の指導の下で考案されたとの記述がある。

- (11) 1904年11月の『偕行社記事』に「所謂征露丸ノ性質」という見出しの記事があるが、文中に「クレオソート」「クレオソート丸」が用いられている。

- ⑪ 征露丸は陸軍軍醫學校の研究に成たる下痢腹痛の豫防剤にして食後に一粒宛を服用せしむる爲め各出征兵士に一ヶ月分入りの罐一箇宛を携帯せしめ爾後其補給を繼續しつつあるものなり〔衛生材料廠の作業:朝刊 2〕

このように、征露丸の効果が日露戦中にすでに知られるようになり、日本が勝利した要因の一つとしてあげられる事さえあった<sup>(12)</sup>。このような背景から、戦争終了後、征露丸は民間薬として多くのメーカーによって製造販売されるようになった。当時日露戦争にあやかっただ商品名は少なからず存在し<sup>(13)</sup>、「征露丸」もこのような時代の流れに沿っていたと言える。

戦後のセイロガンのメーカーの中で、中島佐一<sup>(14)</sup>という人が特に積極的に宣伝を行い、後に日露関係の問題まで発展した以下のような広告文を定期的に新聞に掲載していた。

- ⑫ <前略>「中島の征露丸」は日露戦役当時必須の軍隊秘薬として方剤せられ、あまた貴重な勇士の生霊を保護してきたことによって民間薬

- (12) 「當戦役間に於ける戦病死者の割合が、日清戦争當時に反比例せるを見て、衛生思想の急激なる進歩に驚き我は、不規則なる生活を継続せる兵卒が、毎に必ず征露丸の一粒を缺かさざるを見て、初めて我軍の大勝を奏せし所以を知る」〔右剣左筆 1906: 79〕

- (13) 1904年3月5日の『征露戦報』において次のような記述がある。「日露戦争始まってから種々滑稽な意匠あるが浅草雷門の常盤と云ふ料理屋で屠狼露飯一敗露苦戦（とろ、飯一杯六銭）と貼出した」、「京橋の或煎餅屋が露西亞焼きと云ふ煎餅を造って大きな看板を出し」等。

- (14) 中島佐一の事業は、のちに大幸薬品が継承することとなる。



となって以来も内容は軍需品当時のままでありますから、倍々信用を高めてまいりました。〔読売新聞 1925年10月10日：朝刊 7〕

## 2.2 日ソ国交正常化「親露丸」の登場

このように、クレオソートの丸薬は、日露戦争期に「征露丸」という名で広く知られ、日露戦争後は、民間薬として複数のメーカーにより製造・販売され続けることとなった。

ところが、筆者は外務省記録を調査中、「売薬「征露丸」ノ商標ニ関スル件」という冊子を発見した。この冊子に収録された資料によれば、1925年10月19日、日ソ条約が結ばれ、日ソ間の国交が正常化されたその年に、ソ連大使館から日本外務省宛に以下の内容の苦情が寄せられた。

⑬ 「ソヴィエト」社会主義共和国聯邦大使館ハ「読売」新聞紙上ニ公表セラレタル別添廣告原文ニ関シ帝國外務省ノ注意ヲ喚起スルノ光荣ヲ有ス。右ハ丸薬「中島の征露丸」ノ廣告ナル處其ハ「露国征討」「露国倒滅」其他略之ニ近キ意義ヲ有スルモノナリ

本大使館ハ斯カル廣告ノ公表並假令如何ナル種類ノ商標ナリトモ之ニ斯カル名称ヲ附スルノ事実自体ガ両国間ニ設定セラレタル恒常干係の狀態ニ背反セリト思惟スルヲ以テ、茲ニ帝国内務省ニ為シカカル処置ヲ中止セシムルカ為必要ナル措置ヲ執ラレンコトヲ懇請ス。尚、本大使館ハ本件ニ関シテ執ラレタル措置に関シ通報ニ接セシコトヲ希望ス [JACAR: 第2-3画像目]

このように、ソ連大使館は、読売新聞での征露丸の広告に関して、日ソ両国関係が正常化し

たのに、「ロシアを征討する」という意味を表す商標は不満に思うと述べ、措置を取るよう日本外務省に呼びかけた。

この苦情文を皮切りに、「征露丸」の商標の変更をめぐる、日本外務省・内務省・大阪府庁・中島佐一などを含めた1年以上にわたるやり取りが始まった。それと同時に、外務省記録の「売薬「征露丸」ノ商標ニ関スル件」や東京高等裁判「商標登録無効審判の審決取消請求事件」から窺えるように、ソ連大使館のクレームより2年ほど前から、「征露丸」商標使用者の間で商標権侵害を理由とした裁判が繰り返されていたが、決着がつかないままであった<sup>(15)</sup>。

そこで、ソ連大使館のクレームの影響もあったのか、以下のような理由で1926年1月6日特許局での審判を経て、同年の6月28日に大審院により征露丸の商標登録を無効とした判決が下された。

⑭ 露西亜ヲ征伐スルノ意味ヲ有スルモノニシテ<略>国際間ノ通義ニ反シ秩序ヲ紊ルノ處アルモノト認ム從テ其ノ登録ハ<略>無効ト為スヘキモノトス

上記の判決の結果、中島らの「征露丸」の登録商標が無効となり、一部のメーカーが「戦友丸」「平和記念丸」など、ロシアに友好的な商標に切り替わった<sup>(16)</sup>。この判決では、「征露丸」の商標が禁止されたわけではないが、少なくとも政府機関である特許庁の登録が消されたた

(15) 「征露丸」の商標権侵害をめぐる裁判に関する詳細は東京高等裁判所、昭和46年9月3日「商標登録無効審判の審決取消請求事件」判決を参照。

(16) 例えば、北多摩薬剤師会のHPにおいて、当時の

め、今後「征露丸」の使用が続いたとしても、各企業の責任であり、政府の直接の関与はないということになったと言える。

この結果を受けて、1926年11月6日に日本外務省からソ連大使館に連絡があり、征露丸の件に関して取った措置について次のように報告している。

- ⑮ 「〔征露丸〕の商標に関する大審院の判決」の結果、本件売薬の発売者は之を「親露丸」と改称し、且本年十月廿九日の大阪朝日新聞紙上に別添切抜きの如き広告文を掲載するに至れり（〔 〕内筆者）

この「親露丸」の広告は、10/29、11/ 5、

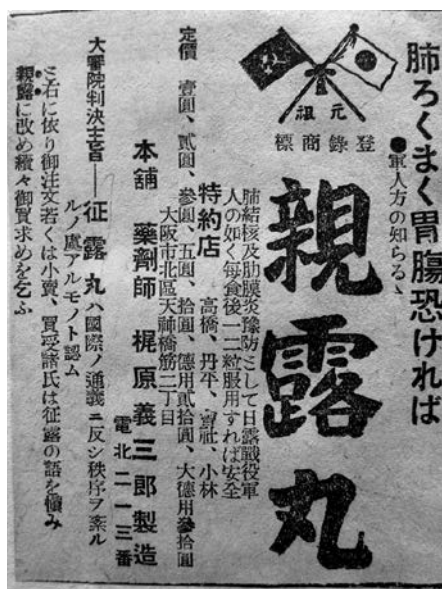


図1 親露丸の広告の切り抜き  
(大阪朝日新聞, 1926年10月29日)

「戦友丸」のパッケージや缶の写真が掲載されている。[http://www.tpa-kitatama.jp/museum/museum\\_48.html](http://www.tpa-kitatama.jp/museum/museum_48.html) (閲覧日時 2017年3月2日19時ごろ)

11/12、しばらく大阪朝日新聞朝刊の9ページに載ることになる。なお、興味深いことに、ソ連大使館に伝えられた広告は、中島の征露丸ではなく、別のメーカーの広告である<sup>(17)</sup>が、ソ連大使館は1926年11月16日の日付で日本外務省の取った措置に満足しているとの連絡をしている。

このように、ソ連大使館からの働きかけの影響もあり、1926年に「征露丸」という商標登録が無効となり、「親露丸」をはじめ、「戦友丸」「平和記念丸」など、ロシアに友好的な名称が現れたが、この場合でも「元名征露丸」などと追記しており、中島佐一のように「征露丸」のまま続けていた業者もあった。

### 2.3 第二次世界大戦後 征露丸→正露丸

「征露丸」から「正露丸」への表記変更についてであるが、大幸薬品のHPに掲載されている情報によると、1949年に「忠勇征露丸」から「中島正露丸」に改められたとある。また、「征」の字に関しては「国際関係上、ロシアを征するという意味の名称はよくないということで、「征」を「正」に改めました」と記載されている。1971年の東京高裁の判例文によれば、「監督官庁の行政指導により、「セイロ」「セイロ丸」等の仮名文字に変えたり、「征」の字を、これと呼称をおなじくし外観も近似する「正」の字で置きかえ「正露丸」の名称を用いるもの

(17) 召喚された中島は、大阪知事と面会し、知事から商標を変えるよう求められたが、宣伝などに高額の資金をかけ、また大変苦勞して「征露丸」で登録できたので、絶対に変えたくないという態度を取った。(詳細については、「売薬「征露丸」ノ商標ニ関スル件」外務省記録『商標模倣関係雑件』第3巻を参照)

が圧倒的に増加するにいたった」<sup>(18)</sup>。新聞における「セイロガン」の表記も、1949-50年辺りに「正」への移行があったことが確認できる。

このような中で中島佐一の死後、製造販売権を受け継いだ大幸薬品は、1954年に今度「正露<sup>セイロ</sup>丸」の商標を登録したが、他の会社がそれに反発し、最終的にまた高裁まで至った後、以下のような判決を以て、またしても登録が無効となった。

- ⑯ 「征露丸」「正露丸」「せいろ丸」「セイロ丸」  
「セイロガン」は<中略>本件医薬品自体の一般的な名称として国民の間に広く認識されていたものというべきであり、したがって、  
<中略>〔「正露丸」という表記は〕商品の普通名称を普通に用いられる方法で表示したにすぎない<後略><sup>(19)</sup>。[東京高裁 昭和46年9月3日判決、〔 〕内筆者]

このように、「正露丸」が国民の間に一般的な名称として広く認識されていることから、普通名詞とされることに至った。辞書にも掲載されるようになり、元は『日本国語大辞典』にしかり収録されていなかった「正露丸」が、2000年

代に入って、『広辞苑』（2008）や『デジタル大辞泉』、大型辞書の最新版に載るようになった。なお、『広辞苑』のみが「丸薬の名」と記載しており、『日本国語大辞典』と『デジタル大辞泉』は「商標名」としている。（文末の表2を参照）

薬の商標名が普通名詞化される前例として「アスピリン」などの例がある。アスピリンの場合は、「もとは商標名」と解説されることもあるが、薬品の一般名称としてどの辞書にも載っており、「正露丸」という語も将来より多くの辞書に収録されるようになるであろう。

## 結 論

本稿では、「露助」と「征露丸」を中心に、日露戦争期に発祥した「露」にまつわる語彙・表記について述べてきた。これらの語の多くは、「征露」や「露探」のように、時代との結びつきが強く、現代においてはほとんど使われなくなっている。一方、「露助」は口頭語性の高い俗語の性格を持ち、「征露丸（正露丸）」は商標名として長らく使われてきたという経緯があるため、現在に至っても両語が比較的によく用いられている。

表記の面では、両語のそれが日露関係の情勢により左右されていたことが今回の調査によって明らかになった。日露戦争前には、「征露丸」と「露助」、それぞれが「クレオソート丸」と「ロスケ」のように、カタカナ表記され、中立的な意味をもっていた。ところが、開戦後に「クレオソート丸」は「征露丸」と命名され、「ロスケ」は「露助」と漢字表記される。

「露助」の日露戦争以前の使用実態について

(18) その他の先行文献や資料において、「厚生省薬務局による行政指導で、「正露丸」に変更された」という情報があるが、具体的な資料は公文書館・厚生労働省に問い合わせたが、原文は残らなかったようである。

(19) 町田忍（2006）によると、現在32種類ものの「正露丸」が異なった会社により販売されている。また奈良県の日本医薬品製造株式会社が「征露丸」で販売を続けている。[p.21]

台湾においても、セイロガンの商標は「征露丸」のままである。[祖国と青年 28号 1997: 7]

は、従来の研究において定かではなかったが、本調査により、江戸後期の漂流記や北方でロシア人と接した日本人の聞き書きにおいて既に「(ヲ) ロスケ」という言葉が使用されていたことが明らかになった。

「助」の漢字が特に軽蔑的な意味合いを持ち、蔑称としての「露助」の定着を促した。戦後には、使用頻度が減少し、「露助パン」のような中立的な意味の混種語も普及したが、70年代に至って、「ロスケ」は差別用語として認識されるようになり、マスメディアでは使われなくなる。

「征露丸」の場合は、日露戦争後に「征露丸」という商標で民間薬として複数のメーカーにより製造販売され、消費者の信頼を得るには「征露」の文字は不可欠な要素であった。

先行研究では「征露丸」は「露西亜を征伐する」と解釈されるため問題となり、戦後に表記が「征露丸」から「正露丸」に改められたことが注目されていたが、今回の調査により、それより20年ほど早く、1925-26年にソ連大使館と日本外務省との間で「征露丸」をめぐるやり取りが行われていたことが分かった。ソ連大使館のクレームの影響もあり、「征露丸」を「親露丸」に一時的に変更したメーカーがあった事実も明らかになった。

名詞としての「征露丸」は、「ロシアを征する」という意味の普通名詞から、「征露丸」という固有名詞（商標名）となり、そして1970年代に「正露丸」という薬の一般名称として普通名詞化されるに至った。

このように、本稿では「征露丸」と「露助」について見てきたが、それらの表記は、両語のイメージ作りにおいて要の役割を果たしたのみ

ならず、「征露丸」のように外交レベルにおいてまで話題となり、日露関係史の新たなエピソードを物語っている。

〔投稿受理日2017.5.31／掲載決定日2017.12.20〕

付記 本研究は、2016年度JSPS科研費（課題番号：16J9302）による研究成果の一部である。

#### 引用文献

- 秋月俊幸「明治初年の樺太 一日露雑居をめぐる諸問題一」『Slavic Studies』第40巻、1993、pp.1-21.  
 「衛生材料廠の作業」朝日新聞、1904年9月22日、朝刊 p.2.  
 大槻玄沢『環海異聞』文化4（1807）年序の写本、早稲田大学所蔵。  
 外務省記録「困難船及漂流救助雑件、露国ノ部」第一巻、明治16（1883）。  
 外務省記録「売薬「征露丸」ノ商標ニ関スル件」『商標模倣関係雑件』第三巻。  
 川瀬幹夫「正露丸事件」『知財ぷりずむ』第4巻、48号、2006、pp.39-53。  
 軍団長陸軍中将「所謂征露丸ノ性質」『偕行社記事』臨時、1904年11月。  
 向後恵里子「露助の表象 一日露戦争期における敵としてのロシア兵イメージをめぐる一」『明星大学研究紀要。人文学部・日本文化学科』第23号、2015、pp.310-301。  
 『征露戦報』實業之日本社、1904-1905。  
 佐藤勇介「『樺太日日新聞』に見る南樺太残留ロシア人の表象 一「露助」という言葉を通して一」『Север』第25号、2009、pp.112-124。  
 シャルコ アンナ「音訳地名の表記における漢字の表意性について 一ロシアの国名漢字表記を例として一」『早稲田日本語研究』第25号、2016a、pp.29-42。  
 シャルコ アンナ「ロシアの呼称・表記の変遷史に見る日露関係」中村喜和、長縄光男、ポダルコ・ピョートル編『異郷に生きるVI 一来自ロシア人の足跡一』第0章呼称考、成文社、2016b。  
 鈴木昶「日本の伝承薬④ 正露丸」『漢方療法』第4巻、11号、2001、pp.71-73。  
 「征露丸／中島佐一薬房〔広告〕」読売新聞、1925年

10月10日, 朝刊 p.7.  
 関口信篤「樺太探検記」『太陽』第1巻, 第4号, 1895.  
 東京高等裁判所「商標登録無効審判の審決取消請求事件」1971年9月3日.  
 名越二荒之助「『征露丸』と『正露丸』知っていますか, 『正露丸』の由来」『祖国と青年』第28巻, 5号, 1997, p.7.  
 「日露役衛生業務(中)」(小池陸軍軍医総監の演説), 朝日新聞, 1906年4月11日, 朝刊 p.4.  
 平岡雅英『維新前後の日本とロシア』ナウカ社, 1934.  
 町田忍『昭和レトロ商店街 ―ロングセラー商品たちの知られざるヒストリー』早川書房, 2006.  
 ―――『マッカーサーと征露丸 ―ニッポン伝統薬ものがたり―』芸文社, 1997.  
 松井俗仏, 山田又太郎 他『右剣左筆 ―凱戦土産―』山桜社, 1906.  
 松岡良之丞『おろすけ人言葉』1811.  
 松川木公『樺太探検記』(明治北方調査シリーズ) 第10巻, 博文館, 1909.  
 源有『魯西亜弁語 表・裏』1796頃.  
 森口展明, 佐藤茜, 木村益雄, 柴田高, 米田幸雄「木クレオソート製剤の史的変遷」『薬史学雑誌』第42巻, 第2号, 2007, pp.110-118.  
 用語と差別を考えるシンポジウム実行委員会編『差別用語』汐文社, 1978.  
 Епископ Сергей “На Южном сахалине (из путевых заметок)” Краеведческий Бюллетень, Южно-Сахалинск, 1991, № 1. С. 33-141.

#### 辞典類

『逆引き広辞苑』岩波書店辞典編集部編, 岩波書店, 1999.  
 『ことばの泉』1898, 明治期国語辞書大系, 普12, 大空社, 2003.  
 『ことばの泉』補遺, 1908, 明治期国語辞書大系, 普18, 大空社, 2010.  
 『辞林』三省堂書店, 1907, 明治期国語辞書大系, 普16, 大空社, 2009.  
 『世界大百科事典』改訂新版, 平凡社, 2007.  
 『日本国語大事典』第二版, 小学館, 2000-2002.  
 『北海道大百科事典』北海道新聞社編, 1981.  
 Smith F. Porter “A Vocabulary of Proper Names in Chinese and English, of Places, Persons, Tribes, and Sects, in

China, Japan, Corea, Annam, Siam, Burmah, the Straits and Adjacent Countries”, Shanghai, 1870.

#### データベース等

聞蔵IIビジュアル (朝日新聞記事DB)  
<https://database.asahi.com/index.shtml>  
 大幸薬品株式会社のHP  
<http://www.seirogan.co.jp/products/seirogan/various/history.html>  
 (閲覧日時 2017年2月20日14時ごろ)  
 ヨミダス歴史館 (読売新聞記事DB)  
<http://www.yomiuri.co.jp/database/rekishikan/>  
 D1-Law.com (第一法規法情報総合DB)  
<https://www.d1-law.com/>  
 JACAR (アジア歴史資料センターのDB)  
<http://www.jacar.go.jp/>



表1 日本の新聞・文献における「ロスケ」

年月日	出典	語形・表記
1796年	『魯西亜弁語』源有	ヲルスカ, ヲロスカ
1807年	『環海異聞』大槻茂質問, 志村弘強 記	オロスケヤ
1811年	松岡良之丞『おろすけ人言』	ヲロスケ人
1883年	外務省記録「困難船及漂流民救助雑件/露国ノ部」第一巻	ヲロスケ (多分魯西亜人ナル)
1895年	關口信篤「樺太探検記」『太陽』	ロスケ土人, 魯斯偈 [ロスケ] (刑餘の魯人なり)
1904年2月 日露戦争開戦		
1904年2月20日	『日露戦争実記』1号, p.17	『この畜生, ロス毛唐 [けとう]』と叫びて後へに倒る
1904年2月27日	『日露戦争実記』2号, p.90	ロスケ
1904年2月29日	『征露詩歌』読売新聞	ロスキーの負惜しみ
1904年3月3日	『日露戦争実記』3号, p.37	ロスキイ
1904年3月5日	『露國退軍歌』『征露戦報』2号, p.106	ロスキー
1904年3月13日	『旅順閉塞決死隊』『日露戦争実記』4号, p.80	ロスケの弾丸
1904年3月13日	『戦士月旦』『征露戦報』2号, p.93	ロス (ロスとは露奴 [ろど] の謂也)
1904年3月20日	『老父の水垢離』朝日新聞	ロスケ退治
1904年3月23日	『海戦前の宴會』『日露戦争実記』3号, p.109	露 [ろ] スキー
1904年4月1日	『勇士の面影』『征露戦報』5号, p.39	オロスケ
1904年4月1日	『滑稽問答』『征露戦報』5号, p.105	魯助 [ろすけ] (露西亜人は一名魯助と云ふだろう)
1904年4月3日	『征露笑報』『日露戦争実記』6号, p.95	露助 [ろすけ], 露助奴 [ろすけめ]
1904年5月1日	『征露戦史』『征露戦報』8号, p.20	ロスキー
1904年5月12日	『露西亜兵続々逃走す』朝日新聞	露助共
1904年5月20日	『ハガキ集』読売新聞	露助奴
1904年6月1日	『剣光餘影』『征露戦報』第11号, p.57	ロスキー
1904年6月6日	『南山陣中の喜劇』朝日新聞	露助奴
1904年6月8日	『露都みやげ』朝日新聞	露助氏とロス嬢
1904年6月10日	『滑稽問答』『征露戦報』12号, p.83	露助 [ろすけ]
1904年6月20日	『勇士の面影』, 『話の種』『征露戦報』13号, p.45	露助 [ロスキー], 露助 [ろすけ]
1904年7月1日	『征露戦報』14号, p.75	露 [ろ] スケ奴
1904年7月3日	『日露戦争実記』20号, p.100	露助 [ろすけ] の腐れ弾
1904年7月10日	『風俗画報』29号	『ウス露助ッ』と叫びつつ走りかかりて
1904年7月10日	『征露戦報』15号, p.74	露助 [ろすけ]
1904年8月15日	齋藤東華「武雄さん！」	露助奴
1904年9月	加藤荊峰「第一砲車」	露助ッ!!!
1904年9月3日	『日露戦争実記』28号, p.21	露助め!
1904年9月16日	『露助奴』朝日新聞	露助奴
1904年9月20日	『征露戦史』『征露戦報』24号, p.17	ロスキー
1904年10月1日	『征露戦報』25号, 口絵, p.89, p.97	露助の猿智恵, ロスキー, ロスキ奴
1904年10月10日	『戦場逸話』『征露戦報』26号, p.66	ロスキー
1904年11月1日	『征露戦報』29号, pp.53-54	ロス, ロスケの黒パン
1904年11月10日	『征露戦報』31号, p.73, p.91	露助, ロスケ
1904年11月19日	『中央軍葉書だより』読売新聞	露助の悪魔
1904年11月20日	『征露戦報』33号, p.74-75	ロスケ
1904年12月4日	『滑稽問答』読売新聞	露西亜人を露助と云ふ理由は如何
1904年12月1日	『征露戦報』34号, p.73, p.82	露助 [ろすけ]
1904年12月26日	『露助を恨んで自殺す』朝日新聞	露助, 露助め
1905年	石原和三郎『日露ぼんち桃太郎のロスキー征伐』	ロスキー (露西鬼)
1905年1月20日	『征露戦報』4号, p.106	露助 [ろすけ]
1905年3月	『奉天付近大會戦記』『日露戦争実記』	ロス
1905年4月7日	『北嶺占領の突貫隊十七勇士』朝日新聞	露助
1905年6月	朴念仁『へなぶり』	ロスケ

年月日	出典	語形・表記
1905年8月17日	「露助は知らず敗北の恨」朝日新聞	露助 [ろすけ]
1905年8月19日	「雨期雑記戦地に於て八月二日」朝日新聞	ロス
1905年10月2日	「満州陣中圖芸」朝日新聞	露助
1906年4月	櫻井忠温『肉弾』	露助
1907年10月	渋川玄耳『従軍三年』	露助の奴め
1907年8月28日	「堪察加行（5）」朝日新聞	露助の占領
1908年1月	二葉亭四迷訳『露助の妻』	露助の妻
1908年8月	「文壇垣覗き」読売新聞	露助の初恋
1909年4月	「露助パン屋の新世帯」読売新聞	露助パン屋（彼等は矢張り樺太より来り）
1909年8月	松川木公『樺太探検記』	露助（ろーすきー）パン、露助学校
1910年5月	夏目漱石『満韓とどころ』	露助
1911年3月	水野廣徳『此一戦』	ロスケめ、「ロスケ」通り
1911年7月	某中尉『戦争の片影』	露助の子、露助の大砲
1911年6月-12月	若月紫蘭『東京年中行事』第2巻	露助
1911年8月25日	「清涼世界（31）」朝日新聞	露助、露助パン
1912年	レンガード『旅順龍城 剣と恋』97巻	露助の嘘言者 [うそつき]
1913年10月	岩野泡鳴「人か熊か」	ロスケの奴
1914年9月5日	「樺太の一瞥（四）」朝日新聞	露助式
1915年8月21日	「独逸東部従軍記（7）」朝日新聞	露助の背囊
1915年	凝香園『鮮血の地図：軍事探偵』	露探の本性、ロスケ魂
1916年	元田作之進『善悪長短日本人心の解剖』	露助 [ろすけ]
1918年	宮地嘉六『煤煙の臭ひ』	露助

表2 辞書における「征露」, 「征露丸」, 「正露丸」

辞書名	出版年	解 説
大辞典	1912	せいーろ（征露）名 露國ヲ征スルコト。－「征露軍」。(上巻)
大辞典	1936	セイロ 征露 露西亜を征討すること。(15巻)
学研 国語大辞典	1978	せい・ろ【征露】名 ロシアを攻め討つこと。とくに、日露戦争のこと。〔主として明治時代に使われた語〕「今年は一の第二年目だから…＜夏目・吾輩は…＞」
日本国語大辞典 初版	1972-76	せいーろ【征露】名 (「露」は「ロシア」の当て字「露西亜」の略) ロシアを攻め討つこと。 せいろーがん…グワン【征露丸・正露丸】《名》胃腸薬の名称。クレオソートを含有した腸内殺菌防腐剤。腹痛、下痢などに効く。(11巻)
日本国語大辞典 第2版	2000-2002	せいろーがん [：グワン]【正露丸】(もとは「征露丸」) 胃腸薬の商標名。クレオソートを含有した腸内殺菌防腐剤。腹痛、下痢などに効く。
広辞苑 第3版～第5版	1983-1998	—
広辞苑 第6版	2008	せいろーがん…グワン【正露丸】胃腸病用の丸薬の名。日露戦争に従軍する兵士のために、陸軍衛生材料廠が赤痢などの予防薬として開発したとされる。当初は露西亜ロシアを征討する意で「征露丸」と名付けたが、後に今の表記に改めた。
大辞泉	1995, 1998	—
大辞泉 第2版	2012	—
デジタル大辞泉	2015更新	せいろーがん [ーグワン]【正露丸】胃腸薬の一。クレオソートを主成分とし、腹痛・下痢などに用いる。日露戦争中に軍隊で使用されたことから、もとは「征露丸」と書いた。商標名。